

ねぎくんと7人の子どもたち

——小学校2年生の1年間にわたる「白ねぎとの成長物語」——

杉 山 浩 之*

Negi-kun and Seven Children:

——“Story of Growth with Shironegi(White Leek)” in the Second Grade
of the Primary School ——

Hiroyuki SUGIYAMA

Success of the learning activities of growing the white leek is characterized by the four points as follows:

First, the growth of the white leek was learned scientifically by the observation and cultivation of the white leek beyond “Seikatsuka” in the second grade of the primary school.

Secondly, the white leek was respected as the life force and accepted as friends (Companion for Life) into the children. Finally, the farewell with the leek was happened dramatically and satisfactorily. It satisfied the children's hearts indeed at the learning of “Kasakojizou”.

The third point, this learning was proceeded with plenty of time (almost everyday from april to december) and without hurry throughout the year. It permitted the children not the passive learning but the active and automatic learning.

The final point, these activities were linked to the local community by utilizing agricultural specialists, taking and giving informations from the community and children's families, giving and selling the leek into the community etc.

はじめに

ここで取り上げる実践は、平成12年の4月から3月までの「生活科」における「白ねぎ栽培と、白ねぎとどのようにしたら納得のいく別れができるか」という問題を追究した学習活動である。現場は、島根県下の山間部の小学校で、全校児童60人足らずの小規模校である。担任は教職経験25年以上のベテラン女性教諭である。学級は8人であるが、一人は足の病のために2学期終了まで不在であった。もともと理科や生活科の実践の経験が豊かな教師である。校長も同じく理科を得意とする教師である。カメラ使

いも高度な技を持っており、この実践でもネギの内部の接写などで学習に供していた。学校の周囲には、水田や畑、兼業農家や民家、そして幅が広くかつ底の深い江津川が水流豊かに悠々と流れている。江津川の流域に狭い土地が広がった地域である。10年に一回ほどは大水で田畑が水害に遭うらしい。学校はそんな狭隘の土地にある。近くの農家から約一反の大きさの畑を学校で借りており、そこが今回の白ねぎ作りの舞台となる。それは学校の運動場を越えて南側に位置している。また北側にもその半分ぐらいの広さであるが、借りている畑がある。そこでは、さつまいもを栽培していた。また、このクラスでピエールというウサギを一匹飼っており、可愛がっているが、実践とのかかわりはな

* 本学助教

い。1年生は3人のクラスで、稲をバケツで育てている。特に合同で学習する場面はない。子どもたちは歩いて登校するほど近くには住んでいない。路線バスで登校してくる。人口密度の低い地域である。それだけお互いを意識し、人情も厚い地域である。困っていれば助け合う。子どもたちもそういう地域に育っている。学校にはランチルームがあり、週一回は全校そろって給食をいただく。給食調理もしている。ランチルームを抜けて体育館がつながっている。冬は寒い外廊下を抜けていく必要がない。校舎は2階建てである。2階には中・高学年の教室、音楽室、家庭科室、図書室がある。玄関のすぐ右が事務室兼職員室である。校長・教頭以下、教職員10人ほどのこじんまりとしたアットホームな態勢である。

筆者(杉山浩之)は、この小学校に、2000年4月から3月までに、計10回の訪問を重ねた。2年のクラスの子どもたちは人見知りしない人懐こい子どもたちで、最初の出会いから、旧知の仲という感じであった。担任とも、お互いに「社会化の初志を貫く会(別称、個を育てる教師の集い)」の会員ということで同志の意識を持って出会い、3月に奈良で行われた研究会(主催「春蘭」)で初めてお会いし、授業研究の話し合いを行い、訪問と共同研究を進めることとなった。

さて、本実践の報告は1学期終了までを前半部分として一度まとめたのであるが、後半部分も早くまとめたかったのであるが、前半と同じような展開ではまとめる意味もなく、と予想していたのであるが、それがまったく予想外の展開を遂げ、見事な総合学習へと発展していった。そのあまりの劇的な終わり方にただ「あっぱれ」と感嘆の気持ち先走り、これほどの価値のある実践をまとめることの怖さに徒に時が過ぎて

しまった。しかし、これほど見ごたえのある実践であるから、早く、広く世間に本実践を紹介しなくてはいけないと思い、この度この機会を借りて、まとめたのである。ときあたかも学校五日制の完全実施、そして総合的な学習が完全実施となり、1年間に過ぎようとしている。しかしながら、学力低下の懸念、総合学習の本来のあり方からの多様化あるいは軽視など、教育改革の趣旨が浸透してきているとは到底いえない。そればかりか、学校教育への不信感が募り始めている。相対評価から絶対評価への転向も大きな課題である。ここでは、総合学習の実践として活動の展開を見ていける。総合学習のあり方に示唆が多いと信じている。

まず、後半の展開を中心に紹介するに当たり、本実践の成功の鍵はどこにあったのかということ、第1部で簡潔に整理しておきたい。参考に、担任作成の資料を末尾に添付する。さらに第2部で、授業研究のスタイルによって、単元の全体の景色、授業記録、子どもたちの動きと学びの様子、特に着目した子どもの自立への歩みという順序で報告したい。(紙面の都合で、第2部は、他日を期すことにしたい。)

I 本実践の特色(成功の鍵)

本実践は1年間という長期にわたる実践である。長期戦は、ともすれば中だるみ、あるいは、しりきれトンボになってしまいがちな生活科や総合学習であるが、そうした惰性や停滞がほとんど見られなかった。問題にぶつかっての停滞はあったにせよ、子どもたちは、白ねぎを「ねぎくん」と呼び、自分たちの仲間のように入力、大切に育て、別れていった。そういう意味で「物語」として、ひとまとまりの流れを持っていた。起承転結が美しいものであった。白ねぎとの出会いと栽培活動を通して白ねぎの七不

思議を発見する「起」、夏の一時期、元気がないと心配しつつ、お世話を怠らなかった「承」、見事に収穫できた549本の白ねぎとどのようにお別れしたらいいのかと悩んだ「転」、かさこじぞうの学習で悩みが一気に解決し、天にも登る気持ちになった「結」と、問題と話題に事欠かなかったという「物語」性である。この間、子どもたちは、鳥取の白ねぎ畑へと家族がそろって出かけたり、広島のお店や地元の市場で販売したり、学校に来るお客さんに手土産としたりと大忙しであった。

筆者もここまで深くかかわった実践は初めてであり、本実践をまとめている今、2年が過ぎようとしている現在も、7人の子どもの顔や青々とした白ねぎの勇姿、そして教室の雰囲気や昨日のように感動とともによみがえってくる。勢いあまって、余計なこと（サトクリフ作「子犬のピピン」を子どもたちの前で読み聞かせしたこと、しかもそれは45分を超えてしまったこと、でも子どもたちは少し眠たい眼をしながらも真剣なまなざしで聞いてくれた。ある男子は足首を捻挫で歩くのが不自由な中、筆者の訪問を楽しみに来てくれていた。）もしてしまったが、それほど、子どもたちの白ねぎを追う姿に心を奪われ、毎月、車で片道2時間以上かけて朝9時ごろから子どもたちが帰る夕方までお邪魔をすることになった。筆者自身も、この1年は白ねぎを育てる子どもたちとの出会いを中心に動いていたといっても言い過ぎではないほどであった。いつも歓待され、休み時間は一緒に遊び、放課後も遊ぶことも稀ではなかった。個人的なことはさておき、本実践が、1年間にわたり、ひと息つく暇もないほど、劇的に展開していった要素（本実践の特色）について、整理しておきたい。それは、総合学習（生活科を含めて）の成功の鍵が、ここに潜んでいると考

えられるからである。具体的には、それらは、以下のように、まとめられる。

- 1 自然観察と栽培活動を科学的に推進し、白ねぎの成長を具体的に学んでいったこと
- 2 白ねぎを世話する活動を通して、自然（白ねぎ）が持つ生命力への畏怖と尊敬の念が生まれていったことから、白ねぎを仲間として受け入れ、心の伴侶に至るまで成長を共にしたこと、さらに、最終的に大切な友だちとの別れを納得できる形で成し遂げられたこと（生き方を学び取れたこと）
- 3 学校経営の条件として担任が1年間一単元を許され、焦らされることなくたっぷりと与えられた時間の経過の中で活動を進められたこと、それは子どもたちが自分たちで進める学習を意味し、学級生活の大黒柱として白ねぎ栽培が位置づき、自分たちの活動を表現する場として、発表会、ねぎくんスゴロク作製、パーティー企画、売り上げの寄付という福祉活動などへと展開したこと
- 4 春休みからの仕込みを行い、家庭や地域の人々からの情報収集、収穫した白ねぎの販売やプレゼントの仕方の工夫、プロの農家や農協の専門家への調査を実施したことなど、社会的な学習ができたこと、要するに地域と結びついた実践であったこと

では以上の4点について、詳しく述べることにしたい。

1 自然観察と栽培活動を科学的に推進し、白ねぎの成長を具体的に学んでいったこと

白ねぎの栽培は、初め、苗を畑に植えるところから始まった。時期をずらして、種（実生）からも育てていった。さらに鉢に白ねぎではない普通のねぎを、3、7、10cmの長さに上を切り落とし、果たして成長するかという実験も行っている。畑の苗は、一間ばかりの長さに渡る1畝をひとり一人に与えられる余裕があったので、それぞれが自分で工夫した肥料の組み合わせで育てることにしたのである。教室でも、種をシャーレに入れて発芽の観察を行っている。学校園である畑には、学校の前に住む農家のTさんの白ねぎが子どもたちとほぼ同じ広さで植えられた。その隣には校長先生が植えた白ねぎの畑（初めは育ちが遅かったが、最終的にはあまり変わらないほどに成長していた）がある。そして、子どもたちの畑には学級全体の白ねぎ畑と各人の一間ほどの白ねぎがある。畑はすべて白ねぎである。このように、多種多様な方法で白ねぎの育ちを観察できるという条件が整っていた。そこから、白ねぎの成長力の強さに敬意を払い、七不思議と称して、白ねぎの生命力の秘密を発見し、ここから「ねぎくん」と呼び、すばらしい尊敬に値する仲間として認められていったのである。こうした科学的な栽培と観察が土台にあって、白ねぎに学ぶ子どもたちの構えが作られていった。1年次にもやはり様々な植物を栽培していたし、生活環境において自然の良さを知っている子どもたちのことであるから、すなおに白ねぎという自然への畏怖の感情をもたらしえていった。白ねぎの世話をしながらも、逆に白ねぎに育ててもらっているという意識を子どもたちが自発的に持てたことが、こうした感情を強めたのである。

2 白ねぎを世話する活動を通して、自然（白ねぎ）が持つ生命力への畏怖と尊敬の念が生まれていったことから、白ねぎを仲間として受け入れ、心の伴侶に至るまで成長を共にしたこと、さらに、最終的に大切な友だちとの別れを納得できる形で成し遂げられたこと（生き方を学び取れたこと）

子どもの感性は大人よりも鋭く、繊細である。自然に最も近い状態にある。自然（白ねぎ）と感応しあい、純粋な感覚で自然と交流する感覚的能力を持っている。意識の上では、それは自然の持つ偉大な力に素直に頭をたれ、感謝し、学び取ろうとする構えとなる。このたびの実践では、白ねぎがその役割を演じてくれたのである。大自然の持つ偉大さを子どもたちを通してわれわれ大人にも知らしめてくれたとも言える。そうして、白ねぎとの出会いが子どもたちにとっては、自分たちの生き方を示してくれる道標のような存在となった。これからの人生の心の伴侶として位置づくほどの重みのある経験をする事ができた。

白ねぎを育てる活動は、毎日の世話が欠かせないというものであり、学級生活の中心におかれていたから、子どもたちの思い入れもどんどん深まっていった。もちろん、それには、日々新たな発見と感動がなければそうは続かなかったであろう。それは白ねぎと子どもたちとの絆をますます強め、子どもの生活になくてはならない存在へと成長していった。そして白ねぎが見事に成長しきって、いざ収穫、そして販売や贈物という終末を迎えたとき、子どもたちは「別れがづらい」「さびしくない方法で別れたい」「大切に育てたネギだから簡単に手放したくない、この気持ちを納得させる解決方法を探したい」という気持ちを起こさせたのである。い

ろいろな工夫をして直接手渡しできる形で、販売したり、贈物にすることができた。さらに、おネギのパーティーや、ねぎくんスゴロクを製作するなどして、寂しさを紛らわそうとしてしていたのだが、それが最終的には、思わぬところから電光石火のごとく閃き、子どもたちの悩みの種を解消し、心から腑に落ちる解決策が見つかった。白ねぎとの思い出が「人生の伴侶」として、子どもたちにきっと残るものとなるであろう。すなわち、この不安な気持ちは、国語の教科書に出ていた「かさこじぞう」の学習で、解消されるに至った。子どもたちのさびしいという気持ちを心の中に持ち続けようとか皆がひとつになったのである。そうして大切にしまっておくことで、時々思い起こすことができると。今、さびしい気持ちを何かで誤魔化して安心するのでは、逆に思い出として残らないのではないかと。こういう考えに気づかせてくれたのは、かさこじぞうのおじいさんの行動であった。いつもおじぞうさんの前を通る度に、「何か恩返しをしてあげないと」と胸の中にしまっておいたから、売れ残ったかさを雪の降る中のおじぞうさんにかぶせてあげることができたのだと解釈したのである。子どもたちの心に、「ねぎくんと別れた後のさびしい気持ちをどうすればいいのか」と、その気持ちを何とか納める方法を追究していたから、その気持ちが心のうちに渦巻いていたから、かさこじぞうの作品に出会って、思い出さざるを得ない状況になったのであろう。ねぎくんとのお別れをしてからひと月近くが立ち、そろそろ解決方法が発見できそうな時期に、この作品との出会いがあったのかもしれない。そのひと月の間に、「この恋い焦がれるような居なくなって寂しい気持ちを持ち続けることが大事ではないか」という考えが徐々に意識化してめぐらされていたのかもしれない。出

会いによる発見には、得てしてそういうところがある。ともかく、子どもたちは、この最後の問題も解決し、1年間の幕を閉じることができた。

- 3 学校経営の条件として担任が1年間一単元を許され、焦らされることなくたっぷりと与えられた時間の経過の中で活動を進められたこと、それは子どもたちが自分たちで進める学習を意味し、学級生活の大黒柱として白ねぎ栽培が位置づき、自分たちの活動を表現する場として、発表会、ねぎくんスゴロク作製、パーティー企画、売り上げの寄付という福祉活動などへと展開したこと

前年度の1年次生活科の実践が、同担任の反省の弁によれば「教師主導で失敗した」ということで、本実践はとことん子どもに任せ、「行けるところまで行く」という構えを初めから担任が持っていたことである。肩の力を抜いて、いい意味での開き直り、自由な学習環境が待ち受けていたのである。そして、一つの単元で1年間を通すという思い切った大胆ともいえる授業構想を持ったことである。それが、子どもがもっとも育つ学習であると、長年の経験からの洞察があったことである。学校経営の環境がそれを許し、7人の学級という小回りが利く学習集団がまた有利に働いたということである。いろいろな条件がそろって、本実践が深まっていったことができる。

子どもたちは、朝昼夕と畑に出かける。生活科の授業でももちろん話し合いが済んだら様子を見にいくという、学級生活の中で活動の太い柱として白ねぎが位置づいていた。

畑仕事は季節によっては目を話せず肝心な要所は押さえておかなければならない。だから、

4月から5月にかけては生活科一色の学級生活であったようである。特に初めの4月ひと月は、他の教科の学習をけずって、白ねぎをどのように育ていくかということに集中していた。それが許される環境にあったことも功を奏したのである。

自分たちの歩みを振り返り、まとめて発表する作業も大変であるが、子どもたちはそんな素振りを見せようとはしなかった。発表の間では自分たちのご自慢の白ねぎを紹介するのだから、一生懸命に精魂込めて作り上げた会心の作を見ただけの願ってもないことであったようである。

4 春休みからの仕込みを行い、家庭や地域の人々からの情報収集、収穫した白ねぎの販売やプレゼントの仕方の工夫、プロの農家や農協の専門家への調査を実施したことなど、社会的な学習ができたこと、要するに地域と結びついた実践であったこと

3月の教材研究のスタートから担任は毎日、時間を惜しんで東奔西走、教材研究を進めていた。特に地域の人材を頼って相談や調査を熱心に始めた。それが偶然とはいえ、着目児と決めていたこの家の祖父が、隣県において白ネギを大規模に育成し出荷しているということがわかった。そうして、一緒に育ててくれる農家や相談に応じてくれる専門家とのネットワークを作っていた。それは、結果的に「地域環境を十二分に活用した」こととなった。

プロの農家の世話の仕方を知り、夏の炎天下でも見てあげないといけないんだと知る。だから、子どもたちも日除けの小屋を作ってそこで一休み、それがまた白ねぎ作りの本職に近づく一歩でもあったのだろう。本物に出会うことで、

仕事の本当の大変さも実感できたはずである。子どもたちは、農家のTさんの畑の白ねぎの成長ぶりを見て、自分たちの白ねぎよりよく育っていることに気づき、「くやしい」と漏らしていた。夏の一時期、そのTさんの白ねぎが弱ったようなときがあった。子どもたちも熱心に水をやりたり心配していたが、真夏もTさんは二日に一回は様子を見て世話をしていたらしい。夏の終わりには子どもたちの白ねぎより立派に成長していたのである。でも子どもたちも畑に足を運ぶことの重要性に気づき、前よりも以上に水遣りや土かけを熱心にするようになっていった。

以上のように、白ねぎは学習材（教材）として以上に、共に生きる仲間として位置づいていった。それは何よりも、時間割を気にせず、学習活動に取り組んでいったことがあげられる。白ねぎ作りを通して、人間の生き方にまで子どもたちの追究が深まっていった。それは、教師の意図ではなく、自然な流れであった。それは、教育の最高目標である「人格の完成」にかかわり、「人間性」を育むものである。「教科を通して人を学ぶ」という言い方があるが、生命ある存在（白ねぎをそうとらえて、つきあうことができた）との共同生活が、結果的にというか必然的に、白ねぎと同様に生命ある存在としての自分たちの「生き方」を見つめる学習へと発展していったのである。自然がもつ大きな力に導かれていったとも言える。

3月の終業式を終えて、担任は異動のために子どもたちともお別れである。しかし、共にねぎくんのお別れを経験しているのだから、そんなにつらくなかったのかもしれない。つらい気持ちは「心のうちにそっとしまっ」てという生きる哲学を身につけた子どもたちである。そ

れは、苦しさから逃れるものではなく、寂しさを前向きに受け止める心の動きであった。白ねぎを永遠に心に刻み、いつでも思い起こせるための子どもたちの知恵であった。子どもたちに脱帽である。7人の子どもたちが白ねぎとの全人格的な交流を遂げていく中で、白ねぎのパワーと子どもたちのパワーが交じりあい、お互いを高めあい、育ちあっていったんだと感慨を深くする。

担任は「ねぎくんのおかげで何でもできる子どもたちに成長した。何でもできると自信を持てるまで成長した」と述べている。さらに「子どもたちはずいぶん、たくましくなり、私はもう追い越されたみたいです」とまで、述懐している。それほど、この1年間の子どもたちの成長は目を見張るものがあったということであろう。

資料1 2学期の動き

4. ねぎくんがいるから力を出し合えた～2学期

a. 元気なねぎくんはどうしてもどってほしい

夏休みの天気下、子どもたちは10日ほど出て、ネギの世話をしたにもかかわらず、9月、Tさんのネギがごとくに回復したのと同じく、子どもたちのネギは元気を失ってしまいました。——Tさんはわたしたちの隣の畑でネギを作りながら、わたしたちにその作り方を教えてくださっている方です。7月、Tさんのネギが突然枯れ始めたとき、子どもたちは自分たちのネギそっちのけで世話をしたのです。——「くやしいけどしかたない」とSy君は言った。夏休みのTさんのネギの世話はわたしたちを上回っていたことを聞いたのだ。「どうしてそんなに元気がなくなったのか」と聞きに行った時、Tさんは、「おじさんは2日に1回は畑に行きつづけたから」と言われた。「おじさんの、だいぶ元気がなくなったが、おじさんのよりみんなのねぎの方がまだええ（いい）よな」と言われた。なるほど、元気はよさそうに見えるけど、子どもたちは、その頃ねぎの調子が上向きか下向きか、ネギの顔色がわかるようになっていたので、その言葉で安心はしなかった。その後、Tさんに聞きながら、やれることをやったある日、「きみどりのねぎはぶくぶくかんがよかった～Ri君」という、ほっとする日がきたのは、収穫も近くになった10月24日のことであった。子どもたちは、色と手触りで、ねぎの調子が上向いてきたことをすくわかった。

b. ねぎくんのことはかんたんにはきめられない

一体何本ネギはあるのか？ それぞれのネギ畑のネギの本数を足してみると、549本。急ぐのは、10月31日から始まる菊祭りのお客さんにネギをおみやげとして渡すかどうか？……それが話し合いの中心となった。
* 菊祭り…〔地域の方に案内して学校の菊を観にきてもらう。期間は10日ほど、延べ100人くらい来校。〕

- Ma 1 100本くらい用意して、ひとりも菊祭りに来なかったら、ネギがもったいないでしょ。もったいないし、新品が消えちゃうから、少しずつ畑から採ってくらばいいんじゃないですか。
- Ri 2 菊祭りのパンフレットを採ったから、たんじゅん、お客さんが来ると思うので、来ないことはないと思う。
- Ma 3 けど、採りたてじゃないと、新品がなくなっちゃうから、それで……
- O 4 わたしは、菊祭りに人が来たとき、ネギの注文をしてもらって、豚汁パーティーに来た人とか、ねぎをもらうけど、豚汁パーティーには行けないという人と、どっちなかに○をしてもらいます。
- Ma 5 Oさんとちょっと似てるんだけど、名前を書いてもらって、畑で採りたてで持って行く。Y地区の人とかはOさんたちが配って、V地区とかは、わたしたちが届けばいいと思います。
- Ta 6 ほんとにもMaさんと同じく、菊祭りのときはねぎをあげなくて、それで、紙にねぎがいる人とか、豚汁パーティーに来た人とか、いらない人とか、○をどれかにしてくださいって書いてくればいいじゃないか？
- Ri 7 ねぎもあげて、それで○か×か聞いて、いりますか、いりませんかと聞いて、あげたりした方がいいと思います。
- Ma 8 じゃあ、ねぎは新品で渡したいから、ひとりも来なかったらどうするんですか？
- Ka 9 わたしは、ねぎを最初（畑に）採りに行って、それで、土に埋めるとお客さんが来たら、ねぎありますか？って聞いて、「はい」と言われたら「ちよっと待ってください」って言って、それで（ベランダに）採りに行ってあげたらどうですか？
- O 10 土に埋めとくってというのは、畑の土に埋めとくんですか？
- Ka 11 ベランダのプランターとかに埋めときます。
- Ri 12 プランターだったら、ふつうネギは入らないと思うんだけど、ネギは長いから、Kさんに聞いたんだけど、ねぎをこみに巻いて立てとくというのはどうですか？プランターは35センチなかったらネギの白いところが飛び出して無理だと思います。
- Ri 13 菊祭りに来た人に「何月何日に豚汁パーティーがありますよ」って言って、「来れば来てください」と言って、「はい来ますよ」って言われたらそれで、腰が痛いとか、病院に行くから行けないとかだったら、無理に来なくてもいいで、来れない人にはねぎを注文してもらう方がいいと思います。
- Ma 14 ちょっとおたずねなんだけど、Ri君はネギをこみに巻いて立てておくってのを止めて、注文をとるのがいいんですか？
- Ri 15 豚汁パーティーと、今からねぎをもらおうと、注文するを決めてもらって、それで……
- Da 16 無理やりネギをあげないで、「今ほしい」って言った人にあげて、「注文するから後でいい」と言った人には後で配って、「やあ、もうねぎがあるからいらない」って言った人にはあげない方がいいと思います。

こうやって決まった4つの選択肢

- ① 豚汁パーティー（12月2日 12時から）に来る。
- ② 今日、ネギを持って帰る。
- ③ 後で届けたい。
- ④ いらない。

から選んでもらうという方法は、やってみて分かったことであるが、いい方法であった。それは、その日、ネギが足りなくても、雨で収穫できなくても、「すみません。今日は、ネギがないので、後で届けます。」

と言えば、お客さんをつかき回さないで済む。さらに、豚汁パーティーの案内ができ、参加者までよかったこと。こういう方法を子どもたちが見つけたのは、Maさんが、新品のネギをあげたいと思い、これはどうしてもゆずらなかつたこと。それに対して、Oさん、Ta君が注文してもらおうという方法を提案する。（O4、Ta5）、Ri君はねぎをその日あげる方法でやりたいと思っている。（Ri6） それに対しKaさんは、いつかK指導員（JA）さんに聞いた、ネギの保存方法（土に埋めとく）を思い出す。（Ka9）さらにRi君は、白ネギの長さを考えて、プランターでは無理で、こみに巻くという方法を提案する。（Ri12）。

そして、Ri君は、豚汁パーティー・その日ねぎをもらおう・注文するの3つの選択肢を思いつく。さらに、Da君がいらぬ人には無理にあげない方がいいと、ひとつ選択肢を増やして4つにする。そこまで予想していなかったけど、この4つの選択肢による方法が豚汁パーティーへの広がりをもたらしたのには、Maさんの個性的なもの（新品で届けたい）と、ネギに対するばさを持った内容のからみあい（「ずれによる創造」上田 薫著 p133）があったからかと思っている。

c. 予想外のことが起こる日々

549本のネギは、菊祭りのお客さんの他にも、「学習発表会に来られた方へ」「給食センターへ」「福祉施設ハートランドへ」と届けることができた。また、JAさんのお世話で、広島のアンテナショップや村のまほろば市で販売することができた。そして、食べていただいた方から、50通を超えるお手紙やファックス、メールをもらった。

ところが、時を同じくして、10月6日、鳥取県西部地震が起きたのだ。わたしたちのところが揺れがかなりあり、校庭に避難した後、教室に帰ってテレビを見ると、震源地が7月に2年生の全家族でおじやました、鳥取じいちゃん（Ri君のおじいちゃん、で、ネギ作りのプロ）の町の隣町だったのだ。幸いお怪我はなく、被害も軽くて安心したが、住んでおられるN町の被害は、報じられているとおりだ。鳥取じいちゃんには、ネギの生育の悪いときアドバイスをいただいたり、夏休みには、ご夫妻でわたしたちのネギを見に来てくださり、作業をしながら教えていただいたりした。そこで、ネギの売上金は全額、鳥取県西部地震の義援金として贈ろうということになり、JAを通じて贈ることができた。

- ・鳥取じいちゃん、Tさんも来られた豚汁パーティーの日…暖かな晴
- ・アンテナショップへ行った日…小春日和の晴
- ・まほろば市へ行った日…暑いほどの晴

教室には今も、てるてるぼろぼろと並んでいる。もう取ってもいいのだが……。お天気は幸いにもわたしたちのために、準備を整えてくれた。豚汁パーティーにはネギくんとかわたしたちのために、20人の方が集ってくださり、その日と同じ温かな会となった。

d. ねぎくんがいなくなったさみしさをうめられない

終業式を控えた12月22日、子どもたちの畑のノートにはこんなことが書いてあった。

1年間ねぎくんといっしょに生きてきて、ちっちゃいときから、くふうとかでのりこえてきたねぎというやさしい、せかいーやさしい、たくましい、ゆうきのあるやさしいのかと思いました（Maさん）

ぼくが思うのは、ぶたじるパーティーに来た人が、泣きながらお話をしてくれたり、おしいとか、よろこんでもらえたから、ぼくはいい。やっぱ、ぶたじるパーティーができたのは、やっぱねぎくんがいてできて、それで、いろいろな人に来て、それで、おいしいといってくれたでしょう。だけど、ねぎがなくなっても、いままでのことを心の中でずっと思い出していればいいと思います。（Sy君）

ねぎのことで、（白いところがみじかいとか）わらったりするけど、気をつけてわらっている。でも、ねぎとの気もちはつながっている。ねぎは、わらっても親友だからおこらない。それから、親友だからゆうこそばがわかる。（ぶたじるパーティーでは）よろこんでくれたけど、ねぎくんといっしょにくらしてきてたのに、ねぎくんがほとんどいなくなってさびしい気持ちです。（Kaさん）

ぼくはさびしくない。なぜかという、心の中に大親友のねぎくんがあるからさびしくない。心の中にねぎくんとの思い出やいろいろなあった思い出が心にあるからさびしくない。（Da君）

ぼくはさびしいです。ねぎくんがいなくて元気が出ないし、ねぎくんのおかげで、あたまでよくなったりして、お世話になっているから。いなくなるとさびしい。さびしいとおしい（豚汁パーティーで喜んでもらったことを意味している）はおもさがちがう。ねぎくんがいなくなったショックが大きい。（Ri君）

わたしは、4月からずっとくらしたり、親友になれたり、いろいろねぎくんのことで、なやんだり、みんなよろこばれても、さみしいきもちがわすれられない。（Oさん）

（豚汁パーティーで）おいしいといわれても、さびしさがとんでこないです。（飛んで行かないの意）いくらおいしいといわれても、さびしいのはかわりません。（Ta君）

ねぎくんとかかわりが深かっただけに、ねぎくんがいなくなると（全部収穫して）、ぽつぽつと聞いた穴は埋められそうにもありません。自分でなんとかなつたというように見える子どもも、やはりどこかにさみしい気持ちを持っているようであった。

資料2 「豚汁パーティーで寂しさを克服できたのか」(授業記録)

12月21日(司会 Ri 黒板記録 Ma)

Ri ねぎくんがいなくても豚汁パーティーで喜んでくれたからいいか、ねぎくんがいなくてさびしいかどっちが重いですか。おたずねはありませんか。

Ri もう一回説明するけど、どっちが重いか比べるでしょ、ねぎくんがいなくなってからさびしいか、豚汁パーティーで喜んでくれたからそれでいいか、どっちが重いか言ってください。

Da 物じゃなくて思いをくらべるんですか？

Ri Da ちゃんが言うのは、物で比べるんじやなくて、心で比べるっていう意味ですか？

Da はい、そうです。

Da Ri 君の言うのは、さびしいと喜んでくれたからいいを比べたんですか？

Ri はい

Ta どっちかにしなければいけないんですか？

Ri ぼくは、どっちが重いということ、こっち(さびしいの方)がぼくにとっては重いです。

T じゃあ、自分の考えをノートに書いて、明日話し合います。

12月22日(金)3校時

Ri 昨日の話し合いの続きで、さびしいと喜んでくれたからいいのどっちが重いですか。

Da ぼくは喜んでくれたからいいです。なぜかという、ねぎくんがぼくの心に大親友のねぎくんがいるから。(間)ねぎくんがひとつ教えてくれたことがある。

Ri ちょっと助っ人なんだけど、ねぎくんが豚汁パーティーに来た人をよろこばせてあげたから、それでいいっていう意味ですか。

Da それじゃなくて、ねぎくんが心に残っているからいいことです。

Ri ちょっとDaちゃんにおたずねなんだけど、豚汁パーティーは喜んでくれていいことで、さびしいは心に残っていると関係がありそうだから、さびしいの方に立場になっているような気がするんだけど。

Ka えっと、わたしはさびしいの方です。なぜかという、いままでねぎくんと一緒にくらしてきて、収穫してなくなってまだ少し残っているけど、でもさびしいです。

Ri ぼくはさびしいの方です。なぜかという、ねぎくんにお世話になってきて、ねぎくんのお陰ですごく勉強になったりして、ねぎくんとずーっといたいんだけど、なくなっていったらさびしい。

Ma 1年間一緒にでなにもかもが一緒に、つらいことも一緒に乗り越えてきて、だからすごくさびしい。

Ta ぼくもさびしいんだけど、ねぎとぼくは、一番の親友だからさびしいし、ねぎを見たら元気が出てきて、それで、いまちょっと残っているけど、ねぎがいなかったらさびしいです。

Sy ぼくは喜んでくれたからいいの方です。なぜかという、豚汁パーティーのときに泣きながら話してくれた人もいるし、おいしいとか言ってくれた人もいるし、喜んでくれた人もいて、それでなくなっても心の中でずっと覚えておけばいいと思います。

Da ぼくは、ねぎくんは心に残っているから、さびしくない。豚汁パーティーとか……(じやなくて)ぼくは心に残ってるからさびしくない。

Ma わたしはさびしいことはさびしいけど、喜んでくれた人にも感謝したいと思います。さびしいとよろこんでくれたからいい真中らへんのような気がする。どっちとは決められない気がする。(本人がネームプレートの中ほどに移動する)

Ri 豚汁パーティーでお礼を言ってくれた人には悪いんだけど、でもやっぱりねぎくんがいなくてさびしいです。

(間 4分)

Ta やっぱぼくは、こっち(よろこんでくれたからいいの方)やってもお客さんに悪いし、こっちいたらねぎくんがさびしいし、だから……。

Ri こっちばかりだったら豚汁パーティーの人に悪いから、

……。

Mo わたしはなんかさびしい気持ちも少しあって、喜んでくれた人の気持ちもあるから、どっちが決められないです。

Da ぼくは、さびしくない方もあるけど、ちょっとはさびしいです。

Ri こっちにも賛成しているけど、こっちにも賛成しています。(どちらの考えにも賛成という意味)

T なんで一応賛成したん？

Ri ちょっと来たお客さんにも悪いから、少しこっちの側の方に。

T 誰々さんに悪いからっていうのは、ほんとにそう思っていないのに悪いからこうするっていうのは、わたしよくないと思う。ほんとうの気持ちで言ってもらわないと。来た人に失礼だとか、来た人にわるいからとかそんなことで話しをしない方がいいと思います。

T もう一度考えてみて、誰々さんに悪いからというのが問題じゃないよ、今。ちょっと休憩して次続きをやりま。

Ri 続きを言ってください。

Ta ぼくは、やっぱりこっちの方がすごく重い。なぜかという、ねぎがなくなったら何ヶ月も見れないからさびしいです。

Da ぼくは、やっぱりねぎくんが心に残っているからさびしくないです。

T おたずね、大ちゃんはどういうことが心に残っているからさびしくなくてすむんですか？

Da それはねぎくんがひとつ教えてくれたことだけど、あきらめないでくじけずにやるっていうことを教えてくれました。だから、さびしくないです。

Ma わたしもやっぱもうちょっとこちらへん(さびしいの方に寄る)に来たような気がして、なぜかという、やっぱり大事だった存在がいなくなるから、ちょっとさびしいです。

Ka わたしもねぎくんといっしょに、朝の活動に毎朝ねぎくんを見に行って育ててきたけど、収穫して少しだけになってさびしいです。

Da でもさびしいって言っても、それは自分らで決めたことだから、アンテナショップにねぎを売るとか豚汁パーティーをするとか、ねぎくんはなんにもしてないから、ぼくらが責任。

Ri でもなくなるとさびしいけれど、でもちゃんと採ったり食べたりしないとうせは腐ったり虫に食べられたりして、はっぱとか枯れたりしてだめになるからあげたんだけど、でもさびしい。

Ta ぼくらは使ったけど、そのままだと枯れてしまつて台無しになっちゃうから、使って、いいときに使って食べてもらった方がいいと思うけど、ぼくは、さびしいです。

Mo わたしは変えてさびしいの方に行くんだけど、なぜかという、ねぎくんと4月からずっと一緒に暮らして、親友になれたからずっと一緒にいたかったけど、いなくなるとさびしいです。

T Mo ちゃんカード動かしたら。

T 記録(Ri) じゃあねえ。

(間 2分)

Ri ほかにはありませんか。

T じゃ、Ha 先生が自分のこといわなくちゃいけないけど、このあたりかなあ、なぜかという、豚汁パーティーはあんな会になるとは思わなかったんだけど、ねぎくんと7人のためにあだけの人が集ってですね、よかったねといってくださって、あんな会ができたこともねぎくんがいたからだから、ねぎくんが教えてくれたことをこれからも忘れないでやっていくのがいいことかなと思う。

Ri なんか、さびしい、さびしくないと言っても、それにいいとか、いってるけど、でもなんか気にくわない。さびしいとおいしいは重さが違う。

T いくらよかったねーといわれてもさびしいが消えるわけじゃないということ？

T 今思うことを書いて終わりにしよう。

資料3 3学期の動き

5. ねぎくんがいなくなったさびしさを乗り越えた～
3学期

a. かさこじぞうからねぎくんへ

1月、ねぎくんがいなくなったさびしさをなんとか埋めようと、ねぎくんカルタを作ろうとか、ねぎくんパズル、ねぎくんの思い出すごろくを作ろうとかという話になり、みんな賛成して、このうちのどれかを作ることが決まっていた。

2月14日、国語で「かさこじぞう」の学習をこの日で終えるという日、Taが「じいさまは、いつもじぞうさまのことを気にしていた。急に思いついたんじゃない。だから、この日かさこをかぶせた。Ri君やばくたちが、ねぎくんがいなくてさびしいいつも思っているように」と発言した。そして、「ねぎくんのことは、さびしいけど、ねぎくんのおへやをここに作る」と言って胸をどんとたたいた。じいさまが、じぞうさまのことを通りがかって突然思いついたんじゃないくて、前々から「じぞうさまには世話になっているなあ、なんとかお返しができないもんなあ」とか思いつつ、気にしていたから、かさこをかぶせることができたというわけだ。ねぎくんのことも、ねぎくんがいたときはよかったなあとか、ほかのことでまぎらわさずに、思い続けたほうがいいんじゃないかと考えたのである。意外なところに解決のカギがあるものである。「さびしさがあるから思い出せていい。全部うめつくさんでもいい」と言い、他の子ども達もTaのことで心にひっかかっていたことが、一気に解決されたのである。Maはこれを、「てっぺんに行ったような気がした」と表現している。

<この話し合いの後の畑ノートより>

かなしい思いをぜんぶうめつくさんでもいい。なぜかという、うめつくせないから。(かなしい思いを)がまんする。がまんしたら、ちょっとは思い出せる。がまんしないと、ねぎくんのことをわすれる。(Da)

ねぎくんがいなくなったら、ほんのちょっとさみしいんだけど、そのさみしさをなくさないで、心の中に入れといて、ねぎのおへやを作ればいいと思います。それと、ねぎのことをTさんたちにいっぱい教えてもらったこともおぼえとけばいいと思います。(Sy)

ねぎくんがいなくなって、ないていてもどうにもならないんだから、少しでもかなしみを心の中に入れていたほうがいいと思います。なぜかという、ねぎくんをわすれたらたいへんなことになるからです。心の

ベツでねむらせてあげようと思います。

あと少しは、「かなしみをたえる」ということもどりよくしてみます。なんかいままでは、心にのこっていて気になってて、今日のはてっぺんに行ったような(納得できたという意)気がします。あそびとか、ゲームとかをいろいろかんがえたけど、3mmくらいへんなかんじみたいなのがあった。(Ma)

心の中にねぎくんの思い出を作って、ときどきねぎくんの思い出をひらいて、心の中でねぎくんの会ったりする。それから、思い出をときどきひらいて、ねぎくんとお話してる。それから、ねぎくんと心がつながってれば、いつもいっしょにいると思う。

それから、かなしいことも楽しいことも、思い出になるから、むりにぜんぶうめこまなくていい。(Ka)

わたしは、ねぎくんがいなくなってすごくさみしいです。なぜかという、ともだちがいなくなるってかんじがするからです。だから、どうにかしてさみしい気もちをなくしてしまおうとすると、わたしでは、もっとさみしくなる気がするから、さみしさのあなをいっぱいおこしておかないとかなしさはなくなる。(Mo)

それと、あながなくなると、ねぎのことわすれてしまうからです。あながなくなると、ねぎくんがうれなくなるからです。(Mo)

ねぎくんのゲームを作ってやってみても、ゲームをつくったからいいやと思って(さびしさを)うめたら、のこっているさびしさがどんどん強くなる。

ねぎくんのへやを作ってさみしさをうめないほうがいい。心にへやを作ったほうがいい。

さびしいことをむりやりうめようとしたら、自分ももついやな気もちになる。だから、うめないほうがいい。(Ri)

きょう、かさこじぞうの勉強をしているときに、ねぎくんのことができました。

ぼくは、ねぎくんがいなくなってもさみしくないです。だって、ねぎくんせんようのおへやを作って、その中に思い出をつめこむつもりです。

ちょっとかなしみがあるけど、かなしみがないとわすれてしまうから、ときどきねぎくんのおへやのドアをノックして、ねぎくんのことを思い出したいと思います。だから、さみしくありません。

かさこじぞうのべんきょうをしてなかったら思い浮かばなかった。きょうでねぎくんのことがすっきりしました。(Ta)

